

令和4（2022）年度 第3学期終業式 および中学卒業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

コロナ禍のうちに過ごした3年目が過ぎようとしています。感染状況は、ここにきてようやく収束が見えてきているようであり、それでいて、その見通しにどうしても一抹の不安を感じてしまうのも否めないところです。流行の初期、パンデミックが宣言されたころに、過去の例を引き合いに出して、第2波、第3波と流行の波を繰り返しながら、収束に向かうには3年ほどかかるだろうとの見通しが語られていたことを思い出しますが、本当にそれだけの年月がかかったわけです。この期間、これだけのパニック状態を、世界中の人々が同時に経験するという事は、実に信じがたく異様なことであったように感じます。同じ経験を分かち合いながら、人々は、孤独感にさいなまれていたように思うのです。対面での交流が制限される中、コミュニケーションの手段がネットを介してのものに限定され、そこでどうしようもない疑心暗鬼が広がったことも、その大きな要因と考えられますが、繰り返し感染状況の厳しい局面を迎える中で、経験が行動の規範にならないということ、つまり、一人ひとりが、常に先行きに対する不安を抱きながら難しい判断を迫られていたということも、孤独感につながっていたのではないのでしょうか。もちろん、我々は皆、医療に従事する方々の尽力や社会インフラを支える役割を担う方々の貢献に、心からの感謝を表明しながら、互いに励まし合っていました。社会全体が停滞する中、人知れず追い詰められて生活を支えきれなくなるケースに心痛めることが多かったのも事実です。ひいては、今、世界を広く覆っている社会の不安定さにも、この孤独感が少なからず影響しているのではないかと思われてきます。このように考えるとき、若い学習者諸君が、思い通りに伸び伸びと学び、多様な世界の諸相と向き合って思考を止めない姿勢を身につけることが、いかに重要であるかということに思い至ります。どうしてもわかり合えない状況があるとき、そのわかり合えない他者への寛容の姿勢は、世界を学ぶことによってこそ養われると思うからです。

そういった意味で、学びの場を本来の形に回復させていくことが、切実に望まれるものとなりました。そして、本校においても、全校あげての学校行事から毎日の授業や部活動の取り組みまで、あらゆる面において本来のあり方を取り戻すための工夫と努力がなされてきたところです。体育祭において全校生徒が一堂に会しての開催を実現したこと、文化祭では本来の日程で来場者を増やして実施したこと、宿泊行事においても本来の活動に限りなく近づけることができたこと、各部の合宿を実施したこと、授業においても対話を取り入れたり本物に触れたりする機会を取り戻してきたこと、今年度の成果は学校生活全体に及ぶものですが、そのいずれをとっても、生徒諸君が主体的に取り組む意志を欠いては実現しないものでした。悩む局面や、悔やむ結果になったことも多かったでしょうが、それらも含めて、君たち自身の取り組みの成果として評価されるものです。新たな年度を迎えれば、これまで制限されていたものの多くが、各自の判断にゆだねられることとなります。まだまだ不安感が残る中で、社会の動きは格段にアクティブになることでしょう。そうなれば、本校の活動においては、ますます学習者たる君たちの主体性に期待されることも、大きくなっていきます。一つひとつ、着実に取り組んでいきたいものです。

ところで、先日私たちは、作家大江健三郎さんの訃報に接しました。大江健三郎さんは、日本人作家として2人目のノーベル賞受賞者であり、その仕事は、日本の良心と評されるものでした。常に社会における弱者の目線に立って、筆の力で世界を変えることができるとひたすら信じつつ、渾身の作品を世に送り続けた作家という印象を、私は抱いています。ノーベル賞受賞時のスピーチである『あいまいな日本の私』において大江さんは、自らを「日本近代の文学において、もっとも自覚的で、かつ誠実だった戦後文学者」の「最後尾に連なる」者と位置づけて、太平洋戦争を生んだ日本の近代化のひずみを糾弾し、広島・長崎の被爆者に思いを寄せつつ、不戦の誓いを自身の小説家としての中心に据えました。また、戦後日本の繁栄を異様なものとして危惧し、原子力発電所への反対運動へも身を投じました。そのような激しい面も示しながら、若い人たちに向けた文章では、思いつめた極端な判断をする前に「ある時間待つ」ことを促し、世の中の難しい問題に対しては「しなやかに取り組む」ことを奨励するような、まさに柔軟性や

懐の深さを示すところも見られるのです。この辺りが「良心」と言われる所以でしょうか。その根本には、自分は「世界の周縁」たる日本の、さらに「周縁の土地」に育った「ひ弱い」者であるという自覚があり、そのような自らの身を以て、「20世紀のテクノロジーの怪物的な発展のうちに積み重ねられた被害」を、鈍痛をもって受け止めるという意識があるのです。

「周縁」の土地に育ったひ弱な存在であるということにまつわるエピソードとして、非常に興味深いものがあります。大江さんは、四国の「森のなかの谷間の小さな村」で育ったと表現していますが、その少年時代に、なぜ学校へ行かなければならないかという疑問を感じ、毎日学校の裏門を通りぬけて森へ入り、植物図鑑を手にして過ごした時期があったといいます。もう学校へは行かないつもりだったそうです。ある秋半ばの日、強い雨の中いつも通りに森へ入った大江少年は、激しさを増す雨に帰ることができなくなり、翌々日、大きなトチの木の洞の中に倒れていたところを村の消防団の人たちに救い出されたのでした。大江少年は、その日から高熱が続き生死の境をさまよう状態であったのですが、その中で、「医師がもう手立てがないと言ったのだから僕はもう死ぬのだろう」と言ったのに対して、母が「あなたが死んでも大丈夫、もう一度生んであげるから。そしてその子に、あなたの記憶をすべて話してあげるから」と言ったというのです。大江さんは、その翌朝からゆっくりと回復に向かい、冬のはじめには自ら進んで学校へ行くようになったのですが、それ以来、自分はその時に死んで、今ここにいるのは、母がもう一人生んでくれた子なのではないか、その子に母が自分の見聞きしたことを全部話してくれて、それを自分が記憶しているかのように思っているのではないかと感じる事が度々あり、そのイメージを払拭することができなかつたのだそうです。とても不思議な話ですが、植物図鑑を手に入れた森へ入り感受したことがらを、その土地の記憶として共有する、つまりその土地の風土を形成するということを示すようで、とても興味をそそられました。大江少年が学校へ行かなくなったのは、戦中の教育とは正反対のことを教師たちが平気で言い始めたからだというのですが、それはおそらく非常に強い言説であり、その圧迫から心を守る方法を、「周縁の土地」の森で見つけたということなのではないかと思えます。

大江さんは、最後の小説となった『晩年様式集(イン・レイト・スタイル)』を、自作の詩の引用で結んでいます。「小さなものらに、老人は答えない、／私は生き直すことができない。しかし／私らは生き直すことができる」。この先、ポスト・コロナの、不安が支配する世界を生きてゆく私たちにとって、弱い存在の声を聞き逃さず、共感と寛容を生み出していくのに必要な感性が、大江さんの作品にはあるのだということを、改めて思わずにはいられません。

さて、中学3年生諸君、ご卒業おめでとう。思えば、諸君が入学したのは、まさに一斉休校期間の最中であり、多くの制限の中で中学3年間を過ごすことになってしまいました。しかし、諸君の学びに対する姿勢を見るに、その成果は、決してコロナ禍以前に比して遜色あるものではありません。諸君は、あらゆる機会において、自らの感受性を総動員して、思考力をフル回転させていたと見えています。ここで「義務教育」を終える諸君には、これからますます伸び伸びと思い通りに学んでいくことを期待します。思い通りに行動すれば、経験が少ないうちはもちろん失敗することも多々あります。しかし、その失敗の経験を通して、人はかけがえのない“ひとり”となっていくことができるのです。「かけがえのないひとり」になることこそ、「自立する」ということです。自立した者は“ひとり”であっても孤独に陥ることはなく、そこには、互いに「かけがえのなさ」を理解したうえでの実り多き交流が実現します。本来の「自立」を期して、存分に活躍されることを望みます。

今年はずでに春爛漫の装いです。それぞれにものを思いつつ、ひとときの休暇を過ごしてください。

以上をもって、本日の式辞とします。

令和5(2023)年3月24日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦